

四島へ掛ける思いの深さ

～日常と隣り合わせの四島に何を思うか～

令和六年 一月十八日

宮崎県 北方領土青少年現地視察

宮崎第一中学校 清水 鈴

北海道で見つけた宝物



ふわふわなキタキツネ



海に張る厚い氷

今回の研修で訪れた日本最東端に位置する根室市。そこで印象に残った光景はやはり肉眼で見える北方領土だ。まさかこんなに近いとは思わず、感嘆の声を上げてしまった。さすが最東端、訪れた北方領土に関する資料館ではどこでも望遠鏡があり北方領土を見る事ができた。それ以外でも海から、展望台から、この三泊四日の短い研修の中で何回北方領土を見る機会があっただろうか。それほど日頃根室に住んでいる人にとっては日常で何度も見るような光景なのにそれに立ち入っていないのが現状だ。納沙布岬には四島の架け橋と祈りの火があり返還を訴えるため今日も佇んでいる。島との距離は最短で約三・七kmだが、今の推定国境は約一・八km地点となっている。一時間も満たずに往けるその距離を地元の人はどう思うのか。



北方領土問題について語り継いでいくことも大切だが、今すぐにでも解決しなければいけない問題だ

生涯をかけた願い

色丹島出身、得能さん。彼は漁業を営む祖父らと楽しく暮らしていたが幼い内に故郷を追い出されその後数年人生の中で最もつらく苦しい経験をして過ごした。彼の話す言葉の節々には北方領土返還を強く訴える表現が多くみられ、特に「北方領土返還を訴えるのは宿命のようなもの」という言葉は当時を経験した得能さんならではの重みがあった。だが楽しい出来事もその中にはあり得能さん自身、今の住民に恨みはないという。得能さんにもし北方領土が帰ってきたら何をしたいかと聞くと「船に人を入れて魚を捕りに行きたい。そのために免許もとってある。」と楽しそうに語った。

友好の鍵

訪れたのは日本とロシアをつなぐ施設。ニホロと呼ばれる「北方四島交流センター」。ここではロシアの文化、日本の文化がそれぞれ詰められた部屋があり、異文化交流ができるようになっていく。やはり相互理解こそが解決のカギであるのだろうか。

今の私にできること

今の私にできることはこのレポートを描いたように思ったことや出来事を後世へ繋ぎ自ら行動していくことだ。

